小規模高齢者通所施設の利用実態と空間の使われ方の特性について

ACTIVITIES AND CHARACTERISTICS OF SPACE USE IN MINI DAY CARE CENTERS

西野達也*, 長澤 泰**

Tatsuya NISHINO and Yasushi NAGASAWA

In Japan, the space of day care centers run by the public insurance for the care needed is normally unified into large one room type. The purpose of this study is to report the actual conditions of mini day care centers, to examine characteristics of space use and also to discuss the possibility and limitation of mini day care centers. Interviews to staff and city government officers and on-site observations of activities were conducted in four mini day care centers in a city, Tokyo. Analysis of users attributions showed there were two types, 'Health promoting Center' and 'House for the elderly with dementia.' And the former was also divided into two by whether they held activity programs or not, one was 'Salon type' and another was 'Activity Program type.' And analysis of space use pattern, combinations of numbers of activities and that of groups in a space, showed there was a condition peculiar to 'Salon type', that everybody shared a room with individual activities. It was named a 'parallel situation'. The paper concluded a possibility of mini day care center was to have such a social situation different from general day care centers, but also mentioned the limitation from the point of impossibility of continuous use of centers after they needed physical helps.

Keywords: mini day care centers, center types, whole condition in a space, parallel situation

ミニデイサービスセンター、施設型、全体状況、パラレルな場

1. 研究の背景と目的

近年、日本の高齢者福祉政策は、高齢者の在宅生活の支援を重視する方針へ移行しつつある。そのような中で、デイサービスセンター（以後、一般型デイと略す）は、介護する家族の負担の軽減のため、或いは高齢者本人の孤立感の解消の場として、自宅以外の場所であることの意義がますます大きくなると考えられる。しかしながら、現状では、いまだに利用者の視点に立った施設づくりが行われていないと言え難い。例えば、システムの問題として、高齢者が要介護状態になってから利用し始めてもなかなか馴染みにくい点、或いは利用者の好みにかかわらず参加を求める集团的活動もある点、利用日が指定される点等が挙げられる。そのような状況の中で、介護保険制度の限界を超えるための自治体独自の試みも見られる。その一つに東京都M市による補助金助成を受けたミニデイサービス施設（以後、一般的なミニデイサービスを「ミニデイ」と略し、特にM市のミニデイを「ミニデイT.H.」と略す）がある。このミニデイT.H.はいくつかの試行点を持つ。例えば、システム面においては要介護度認定とは異なる利用者設定や地域ぐるみの運営体制を取る施設もある点、ハード面では、10人程度の小規模な施設である点や既存の民家等を転用して施設として利用している点等である。本稿の目的は、このミニデイT.H.を実験的な通所施設と位置づけ、ま

ずその利用実態を報告し、次にミニデイT.H.の空間の使われ方の特性を考察し、さらにそれらをもとにミニデイの可能性と限界を論じることである。

2. 本稿の位置づけ

1979年に厚生省によってデイサービス事業が制度化されて以降、一般型デイに関する建築計画の研究には多くの先行研究がある。それらの論点は、主に、利用者属性の把握、施設種類による機能の設定、施設内における利用者の行動の把握による空間計画的示唆、施設配置論等である。例えば大原は、デイの機能として虚弱老人等に日常生活上の援助と場所を提供し、また独居老人に社会的接触の機会を与えることを指摘している²⁾。しかしながら、それ以降、既に15年以上の歳月を経ており、当時、導入期であった一般型デイも現在では成熟期にあり、また2000年の介護保険制度の導入もあって、通所施設をとりまく社会的な状況も大きく変化している。そのような状況において、本稿の調査対象のミニデイT.H.は、自治体の補助金事業であるため、介護保険制度の枠からはずれた高齢者のニーズが見られるものと思われる。その利用実態を明らかにすることは、そもそも通所施設全体の枠組みを再考する上でも重要と考える。

* 東京大学大学院工学系研究科 大学院生・修士(工学)
** 東京大学大学院工学系研究科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Eng., The University of Tokyo, M. Eng.
Prof., Graduate School of Eng., The University of Tokyo, Dr. Eng.

3. 研究の方法

3-1. 本稿の構成

本稿の具体的課題と内容は以下の通りである。

1) ミニデイT.H.の施設型を分類すること（第4章）

まず調査対象としたミニデイT.H.の事業主旨・概要を報告し、次に各施設の利用者属性、利用人数規模、利用圏域、提供サービス、プログラム等からミニデイT.H.をいくつかの施設型に分類する。

2) ミニデイT.H.の空間の使われ方の特性を明らかにすること（第5章）

次に各施設の空間の使われ方の特性を明らかにする。換言すれば、ミニデイT.H.の物理的環境の特性、即ち小規模であることそのものの検証が本章の課題である。そのために各施設の利用者スペース内の全体的状況を分析対象とした。既往研究では、個々の利用者に着目し家具等の部分的な環境要素との関連を分析する手法によって、空間的あり方が追求されてきた^{註2)}。しかし、本稿では、そもそもデイは利用者にとって社会的接触の場であるとの認識に基づき、利用者の空間内での行動を、単に部分的な空間要素との関係から捉

表・1.各施設の概要^{註3)}

記号	A	B	C	D
開設日	平成11年11月1日	平成12年4月17日	平成12年5月11日	平成12年6月19日
敷地面積	369.28㎡	229.93㎡	210.00㎡	727.96㎡
延床面積	88.23㎡	100.58㎡	76.45㎡	159.31㎡
定員	特に設けられていない			
利用対象者	自立・要支援程度 (軽度の痴呆の受入れも可)	自立～要介護2程度 (軽度の痴呆の受入れも可)	特に制限なし (痴呆の受入れも可)	自立・要支援程度 (軽度の痴呆の受入れも可)
事業内容	・ミニデイサービス(会食・趣味活動)	・ミニデイサービス(会食・趣味活動) ・保健婦による健康相談(隔週1) ・送迎(徒歩) ・喫茶部(週1)	・ミニデイサービス(会食・趣味活動) ・緊急ショートステイ ・入浴 ・喫茶室(週1)	・ミニデイサービス(会食・趣味活動) ・入浴
開設日	月～金(祝日も開設)	月～土(祝休)	年中無休	月～金(祝日も開設)
基本開設時間	8:30～17:00	9:00～19:00	24時間	9:00～17:00
基本利用時間	10:00～16:00	10:00～16:00	10:00～16:00(デイ)	10:00～16:00
	但し基本開設時間内でも利用希望があれば柔軟に対応			午前7～9時、午後5～8時は応相談
利用料金	昼食代500円(おやつ代含む) 趣味活動のみ参加、又は おやつのみの場合100円	デイ(基本料金300円、 昼食・おやつ代500円) 徒歩による送迎100円(片道) 喫茶のみ利用300円	デイ(基本料金300円、昼食代500円 おやつ代100円、入浴代200円) ショートステイ6,000円(食費込み) 喫茶のみ利用100円	デイ(基本料金300円、 昼食・おやつ代500円) 入浴代(終日200円、半日300円) 喫茶のみ利用100円
運営主体	地域住民グループA	NPO法人B	NPO法人C	地域住民グループD
組織	・運営委員会(代表・事務担当・チーフスタッフ2名の計4名)を月1回開催 ・3ヶ月に1回「秋の会」全体会を開き、意見交換等をおこなう	・協会より常勤職員1名を派遣 ・地域住民で構成された運営委員会を月1回開催。喫茶部やイベント等の運営企画に参加している	・法人本部で代表、広報営業、経理を担当。運営打合せ会を月1回開催	・役員会(代表、副代表、会計、書記、監事の6名)とワーキングチームスタッフ21名により構成。両者とも月1回会合を開催。
スタッフ体制	曜日にチーフスタッフ1名、サポートスタッフ2～3名	非常勤スタッフ4名がローテーションを組む	日中は常勤スタッフ1名をおき、人手が必要な場合には適宜スタッフを増員	常勤1名(代表、副代表による交代)、通し2名、早番1名(ワーキングスタッフによるローテーション)を配置

施設A

施設B

施設C

施設D

図・2.各施設の平面図(1:300)

施設A

施設B

※1) 第1、3週のみ
※2) 第2、4週のみ

施設C

施設D

※1) 第1、3週のみ
※2) 第2、4週のみ

図・3.各施設の曜日別プログラム

斜線は各プログラムに厳密な時間が決まっていないことを示す

えるのではなく、全体的な状況の中での相対的行動として捉えることにより、空間の使われ方の特性の把握を試みた。

3)ミニデイの可能性と限界に関する考察(第6章)

上記の結果をもとにミニデイの可能性と限界について論じる。

3-2 調査の方法

本研究の調査対象は、東京都M市で展開されるT事業に基づく4つのミニデイ施設(ミニデイT.H.)である^{註4)}。2002年4月から2003年6月まで、各施設における利用者の終日行動観察調査を断続的に行った^{註5)}。またM市高齢者福祉課担当者及び各施設運営者へのインタビュー調査・資料収集を適宜行った。さらに2002年12月には各施設の利用者の属性調査を行った。

4. ミニデイT.H.の概要と施設型の分類

4-1.T事業の主旨^{註6)}

調査対象施設のミニデイT.H.は東京都M市等による補助金事業(T事業)によって運営されている。従って介護保険報酬で運営される一般型デイやミニデイとは異なる。介護保険の「公助」、自らの資金でサービスを購入する「自助」に対して、地域の互助的な関係による「共助」システムの構築が事業の主旨である。

4-2.ミニデイT.H.施設概要

表・1に調査対象施設ミニデイT.H.の概要、図・2に平面図を示す。T事業では地域の資源を有効活用することも一つの目的であり、施設A・B・Cはそれぞれ、既存住宅、被災者用住宅、倉庫を改修の上、転用しており、施設Dのみ新築である。サービスに関しては4施設ともミニデイサービスを基本としているが、施設Cのみ同時にショートステイサービスも提供している。

運営団体は、施設A・Dが地域住民グループ、施設B・Cが地域介護や障害者施設運営のNPO法人である。施設Aでは代表が現場全体に気を配りサポートのスタッフが主に調理・配膳を担当している。施設BはNPO法人の非常勤スタッフのよるローテーション制である。施設Cでは主に訪問ケア主体のNPO法人のスタッフによるローテーションが組まれている。そのため痴呆の程度が重い利用者の対応も可能である。施設Dでは、運営担当のチーフスタッフと調理スタッフとプログラムを担うボランティアの分業によって運営されている。プログラムのボランティアは、運営者の知合いのピアノの先生や元幼稚園の先生等18人が参加している。

図・3に各施設毎の曜日別プログラムを示す。施設Aでは火曜日の午後以外に特にプログラムはなく、専ら各人が手工芸等をして過ごす。基本的には内容は自由だが、手を動かすことが一種のルールといえる。施設Bでは、月に4回のプログラムがある以外は、各人が好きなことをして過ごす。第2・4水曜の手工芸は、あるボランティア指導によるものである。施設Cでは痴呆の程度が重い利用者が多いので、ほとんどプログラムはなく個別の対応である。施設Dでは日替わりで何らかのプログラムが提供される。図・3では各施設の差異が表れているが、プログラム提供の有無は、利用者の身体状況、運営方針等によるものといえる。

図・4は各施設の開設後からの月別の一日当たりの平均利用者数の推移を示す。施設A・B・C・Dは、開設1年をすぎた頃から、それぞれ8人、5人、3人、10人程度で安定してきていた。これらをもとに、各施設の利用者室における平均人口密度(㎡/人)を算出すると、そ

図・4.各施設の開設後の月別一日平均利用者数の推移

図・5. 年齢構成^{註7)}

図・6.各施設の利用者男女比

図・7. 施設別の利用日数

表・3.各施設別の利用者のADL^{註8)}

第 3 回 施設別 4 月 1 日 午前 9 時 45 分

施設A

	A	B	C	D	O	E	F	G
0	13							
I	4							
II	1							
III	1							
IV								
V								
VI								

施設B

	A	B	C	D	O	E	F	G
0	12		1					
I	1							
II	1							
III			1					
IV								1
V								
VI								

施設C

	A	B	C	D	O	E	F	G	?
0									1
I		1				3	2	1	
II									
III		1					2	1	
IV	1						1		2
V							1	1	1
VI									

施設D

	A	B	C	D	O	E	F	G
0	25	2						
I	2	1						
II								
III	3							
IV								
V								
VI								

施設CではADLが不明の利用者は「？」とした

■ADL自立度のスケール (Katz.S.)

- A: 食事、排泄コントロール、移動、トイレ使用、更衣、入浴の自立
- B: 上記1項目以外は自立
- C: 入浴と他の1項目以外は自立
- D: 入浴と更衣と他の1項目以外は自立
- E: 入浴と更衣、トイレの使用と他の1項目以外は自立
- F: 入浴と更衣、トイレの使用、移動と他の1項目以外は自立
- G: 6項目すべて介護を要する
- O: 2項目以上に介護を要するが上記にあてはまらない

■痴呆スケール (BERGER)

- 0: 痴呆なし
- 1: 物忘れがあるが、日常環境ではほとんど問題なし
- 2: 既知の環境においては自立している
- 3: 既知の環境においては指導、助言を必要だが、指示のみで十分である
- 4: 指示だけでは不十分で、具体的な介護を必要とする
- 5: 日常行為全てに介護が必要であり、言語による会話で成立しない
- 6: 寝たきり、車いすに座ったままで言葉に無反応。身体接触のみに反応。

れぞれ3.8、6.0、13.5、6.6となった^{註9)}。従って、平均人口密度はA<B<D<Cという関係にある。

4-3.利用者属性

図・6に各施設別の利用者の男女比を、図・5に4施設の利用者の年齢構成を示す。利用者の男女比は、施設C以外、利用者はほぼ全員が女性であった。各施設毎の利用者の平均年齢は順に81.2歳、80.3歳、84.4歳、83.3歳であった。どの施設も80代前半の後期高齢者であり、施設Cの平均年齢が若干高いが、特に大きな違いは見られなかった。表・3に各施設毎の利用者のADL、痴呆の程度を示す。表・3により施設Cの利用者属性が他の施設と傾向が異なることがわかる。つまり施設A・B・Dの利用者の傾向は、女性で、ADLが自立しており、要介護度の認定もなく痴呆の程度も軽い。一方、施設Cの利用者は、他施設に比べて、ADLが低く痴呆の程度も重い。従って、利用者属性の点から、施設A・B・Dは比較的高齢者の自立度の高い高齢者を対象とし健康維持・寝たきりや要介護状態を予防する「予防型」、また施設Cは痴呆性の高齢者を対象とする「痴呆特化型」と定義した。施設A・B・Dは表・1に示す利用対象者の規定に沿ったものである。一方、施設Cでは利用規定として特に制限を設けなかったため、当初は利用者層に偏りはなかったが、徐々に痴呆性老人に偏っていった^{註10)}。

図・8は各施設の利用者の居住形態の割合を示す。施設A、B、Dでは、独居高齢者が4割を占めていた。これにより「予防型」のミニデイト.H.が、独居高齢者にとって社会的な接触の場としての機能を果たしていることがわかる。これらの施設が独居者を対象として規定しているわけではないことを考慮すれば、結果として独居者のニーズが存在していることを示すものと捉えられる。また、家族と同居しているが日中は独居となる者も各施設で2-3割程度おり、両者を併せると各施設で6-7割は日中の独居者の利用であり、「予防型」の利用者の傾向の特徴を示すものと思われる。

上記では各項目毎に利用者属性を見てきた。ここでは特に「予防型」（施設A・B・D）の利用者69名を対象として、ADL・痴呆度・居住形態・現在の住まいの居住歴の組合せによる分類を試みた（表・4）。これらの組合せは理論的には396組可能であるが、少なくとも一人は存在した組合せは全部で19組であった^{註11)}。うち10%以上の比率を占めるものは4組であった。それらは、いずれも自立しており、痴呆がなく、現在の住まいに10年以上住んでいる高齢者であり、単身や家族同居等の居住様態の違いによって4通りとなった。これが大凡の「予防型」の利用者像といえる。

4-4.利用傾向

図・7は各施設毎の利用者の利用日数の比率を示す。全体の7割の利用者が週1〜2日利用していた。中には週5〜6日利用する人も見られミニデイト.H.が利用者の生活に深く根付いている様子も窺える。

4-5.利用圏域^{註12)}

図・10は各施設毎の距離別利用者累積出現率を示す。施設A・B・Dは50%出現距離は約250m〜400m、80%出現距離は約525m〜780mであった。一方、施設Cの50%出現距離は約950m、80%出現距離は約3,700mであった。ここでも施設A・B・Dはおおよそ似たような傾向を示す一方、施設Cのみ利用圏域が大幅に広い。これは施設Cの利用者は約8割が車で送迎されていることと関係が深いと考えられる（図・9）。同図によると施設A・B・Dの利用者の通所手段は少なくとも8割以上が徒歩であった。また全体で見ても700m以内の利

図・8.各施設の利用者の居住形態の割合

表・4.予防型のミニデイト.H.の利用者属性の分類

No.	ADL	痴呆スケール	居住形態	居住歴	人数比率
1	A	0	1	1	27.5%
2	A	0	4	1	15.9%
3	A	0	3	1	14.5%
4	A	0	2	1	10.1%
5	A	1	1	1	7.2%
6	A	0	1	2	2.9%
7	A	3	1	1	2.9%
8	B	0	3	1	2.9%
9	A	0	4	2	1.4%
10	A	1	3	2	1.4%
11	A	1	4	2	1.4%
12	A	2	1	1	1.4%
13	A	2	4	1	1.4%
14	A	3	3	1	1.4%
15	A	3	4	2	1.4%
16	B	1	3	2	1.4%
17	C	0	4	2	1.4%
18	C	3	3	2	1.4%
19	G	4	2	1	1.4%

凡例	居住形態
1	単身
2	夫婦のみ
3	家族同居
4	家族同居（日中独居）
居住歴	
1	10年以上
2	10年未満

図・9.各施設の通所手段の割合

図・10. 各施設の距離別利用者累積出現率

図・11. ミニデイト.H.の施設型の分類

利用者の通所手段は9割以上が徒歩であった。各施設は事業方針によっておよそ1丁目を利用圏域として設定する予定であったが、未だに全所的に施設が整備されていないこともあって¹³⁾、実際の利用圏域はそれよりも広がっていた。また施設Cの利用圏域が突出して広い理由として、痴呆性の高齢者を対象として、比較的フレキシブルなニーズに応える施設が他に見あたらないことも挙げられる。

4-6.ミニデイT.H.の施設型の分類

以上よりミニデイT.H.4施設を下記のように分類した(図・11)。まず利用者属性によって、施設A、B、Dの利用者は、要介護度認定のない自立した高齢者がほとんどで、健康維持・寝たきりや要介護状態を予防する「予防型」と分類した。一方、施設Cは痴呆性高齢者を対象とする「痴呆特化型」と分類した。また、同じ「予防型」でも、4-2で見たとおり、施設側の提供するプログラム活動の有無によって、さらに「サロンタイプ(S.type)」と「アクティビティプログラムタイプ(AC.PR.type)」の2つに細分類した。

5. 各施設における空間の使われ方の特性

本章では各施設における空間の使われ方の特性を明らかにする。

5-0.分析の方法

本章の分析では、空間の使われ方の特性を見るにあたり、各利用

者の活動の集積によって構成される全体的状況の観点からの分類を試みた¹⁴⁾。なぜならば、これまでデイの空間内での行動は個人単位の考察が行われてきたが、通所施設の一つの大きな役割が「社会的な接触の場」にあるならば、各施設の全体的状況の中で、各個人が他者との関係を測りつつ、いかなる行為をとりうるかが重要であると考えからである。これは「すべての集まりはある程度それにふさわしい行為を定めている」(E.ゴッフマン、1963)¹⁵⁾という説に基づいている。特にミニデイは全体状況の点において各施設の特徴が顕著に表れるものと思われる。

具体的には、まず観察調査で得られた各施設における10分間隔の終日活動マップを、各施設毎に2日分ずつ抽出した。この際「サロンタイプ」の施設に関しては、プログラム活動が全くなかった日と、プログラム活動があった日¹⁶⁾を選んだ。また「アクティビティプログラムタイプ」の施設については、プログラムが一つのみの日と二つのプログラムが同時進行した日を選んだ。次に、それぞれの活動マップから、二人以上の利用者がいる場面を抽出した。そして、それらの場面に対して、A.その時間帯が施設の公式なプログラム時間帯(O;Official) 可否か(N; No-Official)、B.その時の利用者の活動の種類数(活動軸;S(Single),M2(Mixture of 2activities),M3(Mixture of over3activities),M-Ind(Mixture of Individual

活動軸 空間軸	単一の活動	活動の混合			
	S: 1種類の活動	M2: 2種類の活動	M3: 3種類以上の活動	M-Ind: 各人が個別の活動	
I gathering	D 03.06.14-1150 体操の先生 タオル体操	B 03.12.18-1330 紙糊工 絵手紙 カゴ作り 絵手紙 ボラン ティア 絵手紙	B 03.04.18-1100 ビーズ ビーズ 会話 手芸 切手はがし ビーズ 見る パレルな場	B 03.11.28-1450 紙糊工 TV 編み物 見る 紙切る パレルな場	
II split	D 03.06.14-1220 昼食	D 03.06.19-1330 編み物 音楽	A 03.12.18-1420 お茶 見る 裁縫 カゴ作り ヒモ切出し	C 03.05.16-1230 会話 歩く	
III spread	理論上あり得るが 実際なかった	理論上あり得るが 実際なかった	D 03.06.19-1540 会話 編み物	理論上あり得るが 実際なかった	

■活動軸(activity axis)

S (single) : 全体で一種類の活動

M2 (mixture of 2 activities) : 全体で二種類の活動

M3 (mixture of over 3 activities) : 全体で三種類以上の活動

M-Ind (mixture of individual activities) : 全ての個人が異なる活動をしている場合(人数によってはM2, M3との重複もあり得るが、全員が異なる活動をしている場合を特にM-Indとして分類した。従って、M2、M3、M-Indの並び方に数値的意味はない。)

■空間軸(whole spacial condition axis)

I (gathering) : グループが1つ

II (split) : グループが2つ

III (spread) : グループが3つ以上

■時間軸 (time axis)

O (Official) : 昼食、おやつ、公表されているプログラム活動の時間帯

N (Non-Official) : 上記以外の時間帯

上記の事例図では時間軸を省略した。即ち、実際の分類においては、各項目に、さらに公式なプログラム時間(O) 可否か(N)の細分類がある。各欄の表記は、時間軸-活動軸-空間軸の順に行う。例えばO-M2-Iは「プログラム時間帯で、全体で2種類の活動があり、グループが一つである」ことを示す。

図・12.分類の事例図

activities), 但しスタッフの活動は含まない) 註17), C.その時のグループ数(空間軸; I(gathering), II(split), III(spread))によって分類した。この際、公式なプログラム時間とは、昼食、おやつ、公表されているプログラム活動をさす。またグループ数は、主に一つのテーブルを囲むグループを1とカウントし、同じ空間内にそのようなグループがいくつ同時に存在するかを数えた。これらの分類軸を導入することによって、施設内における全体的状況を客観的に分類することができると考えた。図・12に各項目の事例を示す。また、今回は調査対象ではないが、一般型デイについてもこれらの軸を用いてミニデイと対比的に示しうると考えた。尚、行動観察調査時期はいずれの施設も開設後2年目に当たるため、その状態は、初期の事業計画に対してある程度安定したものと言える。各施設毎に分類の結果をまとめたものが図・13～図・20である註18)。30%以上の出現率であった欄に濃い網掛けを施した。

5-1. 予防型—サロントタイプ(S.type)

S.typeはほとんどプログラム活動のない日であることから、プログラムなしの日のデータが通常のもので受け取れる。施設Aの場合、図13.N-M3-I、即ち一つのテーブルを囲んで各人がやりたいことをしている状態が典型的な場面である。一方、施設Bの場合、同様に一つのテーブルを囲んで各人がやりたいことをする場面が多いが、さらに各人が完全にバラバラな活動をする図15.N-M-Ind-Iが典型的な場面として抽出された。これらのような「同じ場を共有しつつ別々の活動をする状態」を「パラレルな場」と呼ぶことにする註19)。この現象の生起要因としては、第4章で見たプログラムの差異や利用者属性等の社会的・人的環境も含めた総合的な環境による部分もあるが、小規模な空間に依る部分も大きいと思われる。つまり、ある程度、空間的に限定された方が、例え異なる活動を行っていても、同じ場を共有している一体感が増すものと思われる。また同じS.typeでもこのような差異がある理由として次のものが考えられる。一つはこれらの施設間で平均的な利用人数が異なり、人数が多ければ多いほど活動が重複する可能性が高くなるため、もう一つは施設Aでは何らかの手芸をすることが奨励されているため、各利用者間で互いに教えあう等して同じ活動が伝播するためであろう。

またS.typeにおいて、月に数回のプログラムがある日のデータを示すのが図・14、図・16である。施設A、Bともに活動軸と空間軸の双方においてプログラムのない日の傾向との類似性が見られる。これは主にプログラムのある日でも、プログラムのない時間帯は通常の状態であるためと考えられる。但し、空間軸をよく見ると、施設Aの場合、プログラムのある時間帯には、プログラムに参加するグループと他の活動をするグループで空間的に分かれる場面が見られた(図14.O-M3-II、図14.O-M3-III)。一方、施設Bでは、異なる活動をする人も、同じテーブルに同席している場面が見られ(図16.O-M2-I、図16.O-M3-I)、空間軸II、IIIへの展開がなかった。即ち、空間的には未分化であった。これらの差異の要因は、テーブルが複数個あるか否かという空間的余裕と設えの差異によるものと考えられる。空間的余裕のない施設Bにおいては、通常のプログラム活動のない時からして異なる活動が同じ場において混合することが標準化している(パラレルな場)。そのため、プログラム活動時においても、その状態の影響を受けているものと思われる。即ち、ここでは空間によって活動を分けるのではない形が見られた。

図・13.施設A-NPR(2003.04.18)

図・14.施設A-1PR(2003.12.10)

図・15.施設B-NPR(2003.11.28)

図・16.施設B-1PR(2003.12.18)

図・17.施設C-NPR(2003.05.16)

図・18.施設C-1PR(2003.12.12)

図・19.施設D-2PR(2003.06.19)

図・20.施設D-1PR(2003.06.14)

図・13-図・20の凡例
 * 0-15%未満 ○ 45-60%未満
 △ 15-30%未満 ● 60-100%
 O:Official時間帯を示す
 □ 30-45%未満

図・21.活動種類数別の時間内訳

図・22.グループ数の時間内訳

5-2. 予防型—アクティビティプログラムタイプ(AC.PR.type)

AC.PR.typeでは毎日何かしらのプログラム活動があるので、プログラム活動が一つの場合と二つの場合を比較した。プログラム活動が一つの日の場合、図19.O-S-Iが最もよく出現している。一方、プログラム活動が二つの日では、図20.O-M2-IIが多く見られ、さらに図21.O-M3-IIIにも展開している。即ち、プログラムグループ毎の空間的分離が顕著に見られた。この要因としては空間的展開の余裕があることが挙げられる。

5-3. 痴呆特化型

参考までに、痴呆特化型の施設Cについても述べる。施設Cでは、調査時の利用者数が2人であったため、その利用者間での関わりがない限り、ほとんど全ての時間帯がM-Indに分類された。即ち、隣に座りつつもほぼ個人ベースの活動をする場面が顕著に見られた。これらの結果は、施設Cの利用者数が一日平均2〜3人であること、また利用者のADLが低く、痴呆の程度が比較的重いため、個人的なケアを受ける場合が多く、具体的な活動が難しいことから、ある程度、妥当なものと思われる。

5-4. 各施設型の特性の比較

次に、第4章で分類した施設型と本章で分類した特性の傾向を比較する。第4章では利用者属性やプログラムの有無などの客観的情報をもとに分類した。一方、本章では実際の行動場面から、全体状況を活動種類とグループ数によって分類した。その両方の方法によって、各施設が同様に分類されたことは、利用者属性・プログラムの有無等と、各空間の使われ方に相関があることを示すものとして特筆すべきことと思われる。

次にAC.PR.typeとS.typeを比較すると、活動軸において顕著に差異が見られた。AC.PR.typeの場合、Single側に寄っている。これは、AC.PR.typeの場合、そのプログラムに利用者がほぼ全員が参加するため、活動数が一つにまとまっていることを示す。一方S.typeの場合、Mixture側に寄っている。これは、前述の通り、各人がそれぞれの活動をしている集積が全体状況を作っていることを示す。このように各施設型において全体の活動の様態が異なるものといえる。

また各施設において、30%以上の出現率があった項目をピックアップして一つにまとめたのが図・23である。S.typeの特徴として「一つの場を共有しつつ、別々の活動をする（パラレルな場）」、一方、AC.PR.typeは「一つの活動を共有し、活動毎に場所を分け隔てる」という特性が指摘される。つまり、S.typeは「場が結ぶ」、一方、AC.PR.typeは「コトが結ぶ」ものと対比されよう。また空間的余裕がない場合（SALON-B）には「場所は変わらずに時間によってモードが変わる」、空間的余裕がある場合(SALON-A, AC.PR)には「場所を変えてモードを変える」特性も指摘できる(図・24)。

また、あえて一般型デイとの対比を行うため、一般型デイの典型的と推測される状況を、筆者の経験的判断により^{註20)}、図・23に★印で示した。即ち、S-I（例：全体体操等）、S-III（例：テーブルに別れて食事等）、M3-III（例：各テーブル毎に趣味活動等）である。一般型デイの傾向はAC.PR.typeに近いものと思われる。こうして一般型デイと比較すると、サロンのミニデイT.H.固有の空間の使われ方の特性として「パラレルな場」が指摘される。これは場所としては小さくしかも単純であるにもかかわらず、その中で多様な活動が見られる点で、一般型デイのような多様な活動を内包す

	Single	M2	M3	M-Ind	
I	AP, ★		Sa	Sb, D	Sa, Sb, D, AP
II		AP			Sa, AP
III	★		★		
	AP	AP	Sa	Sa	Sb, D
	AP	AP	Sa, AP	Sb, D	

略記号 Sa・・・Salon type (施設A)
 Sb・・・Salon type (施設B)
 D・・・Dementia (施設C)
 AP・・・Activity Program type (施設D)

図・23.施設型毎によく見られた様態の傾向

	SALON-A	SALON-B	AC.PR (D)
活動	各々が別々の活動をする	各々が別々の活動をする	各々が同じ活動をする
共有するもの	場所	場所	活動
モード変更	場所を変える※	席が変わらず、時間帯による	場所を変える

※週に一度のプログラム活動（お茶）の時のみ見られる

図・24.各施設型の特性

る大きな空間とは異なる。またいわゆる多様な活動を包含する多様な場を推奨する計画論^{註21)}とも異なる立場にある。

6. ミニデイの可能性と限界に関する試論

本稿は東京都M市等による補助金事業によって運営されているミニデイT.H.を対象としたケーススタディであるため、ミニデイ一般に拡大して解釈することは必ずしも適切ではないかもしれない。しかしながら、ここで見られた結果をもとに、あえて試論としてミニデイの可能性と限界について述べたい。

まずミニデイの可能性について。予防型の施設に対して、第4章のような利用実態が見られたことは、少なからずこれらの場を求めているニーズがあることを示すものと考えられる。つまり、通所施設は要介護者に介護サービスを与えるだけの場ではなく、要介護の有無を問わず、特に独居、日中独居の高齢者の社会的ニーズがあるものと言える。

またS.typeのように、アクティビティプログラムの有無にかかわらず、施設利用の定着が見られることから、利用者にとっての居場所としての役割といった、より本質的な意味づけもあると考えられる。その際に、第5章で定義した「パラレルな場」は、ミニデイT.H.固有の状態であり、一人一人が個別的な活動しながらも、全体的な共有感を得られることは、個々の居場所を保証しつつ、通所施設の本質的意義である「社会的な接触の場」としても機能する重要なあり方の一つであるといえる。

次に、ミニデイの限界について述べる。ミニデイT.H.の施設型を分類する際に利用者属性を基準にしたが、これは小規模な集団における精神的レベルの差の大きな利用者どうしの混合処遇が難しいと考えられることによる。実際、これらのミニデイT.H.は、アクティビティプログラムや場を共有手段としてしていると指摘したが、そのため、それらの秩序を共有できない利用者の利用は難しい。註10)の事例のように、利用者層の偏りは、施設による利用者層の設定とい

う誘導的側面と同時に、利用者間の自然な志向が反映されたものと考えられる。従って、自律的な集団形成の観点から、ミニデイT.H.で見られた予防型と痴呆特化型の2つがミニデイの基本的な施設型であるといえる。即ち利用者の精神的な属性が施設種の分水嶺になるものと考えられる。何らかの身体的障害があっても精神的に自立していればミニデイT.H.の利用は可能である事例も見られた。ミニデイT.H.が二つの型に分離しているのは、一般型デイにおいては混在している利用者属性が、小規模であるためにどちらかに特化せざるをえない結果であろう。

しかしミニデイが必ずしも理想的であるとは限らない。なぜならば、ミニデイT.H.においても、年々、利用者の虚弱化が問題として顕在化しつつあるからである。本格的なケアスタッフのいない状態では対応が難しいのである。利用者スタッフ、或いは利用者間の継続的関係構築の観点からすれば、何らかの身体的ケアの必要性が生じた後にも、自律的な集団を形成しうる限り継続利用可能なシステムが模索されるべきである。しかしながら、前述のように規模が小さいだけにその混合処遇が難しいというジレンマが存在する。

7. まとめ

本稿では、まず一般型デイに対する実験的施設としてのミニデイT.H.について、利用者属性傾向から「予防型」と「痴呆特化型」の2つの施設型に分類した。ミニデイではその小規模故に、利用者の精神的属性が施設種の分水嶺になることから、この2つが基本的な施設型であることを指摘した。さらにプログラムの有無により、「予防型」を「サロンタイプ」と「アクティビティプログラムタイプ」に細分類した。そして次に各施設における空間の使われ方の特性を指摘した。特に「サロンタイプ」のミニデイT.H.に固有の空間の使われ方として「パラレルな場」が挙げられた。これは一般型デイにおいて典型的なワンルーム型の比較的大きな空間内での様態とは異なるものである。この特性は通所施設の意義である「社会的な接触の場」に対して、一つのあり方を示しているものと思われる。この点等においてミニデイの通所施設としての可能性を指摘しうるものの、同時に利用者の継続的利用の観点からの限界もあることを指摘した。

8. 今後の課題

「痴呆特化型」のミニデイに関しては、今回、詳察できなかった。今後ニーズが増加する施設であると思われるが、そのあり方に関する考察は今後の課題となった。加えて、以下の点を今後の課題とした。

- ・施設の空間規模の大小が利用者のコミュニケーション行為に与える影響はいかなるものか？
- ・既存家を施設に転用することの環境行動的な意義は何か？

註

- 1) 文献1) 参照。
- 2) 例えば、文献2) 等。
- 3) この図はM市高齢者福祉課資料(2002)をもとに作成した。
- 4) 平成15年4月に5件目のミニデイが開所したが本稿では対象外である。
- 5) 各施設への訪問調査日は以下の通り。
【施設A】[2002]4/18、11/14、12/10、12/11 [2003] 4/15、4/18
【施設B】[2002]5/14、5/24、9/5、10/17、10/24、10/31、11/28、

12/18、12/26、[2003]2/6、2/13、2/20、3/6、3/13、3/20、3/27、4/7、4/10、4/17、4/24、5/1、5/15、5/29、6/5、7/3

【施設C】[2002]5/16、12/12

【施設D】[2002]4/3、4/16、5/14、5/19、5/27

6) T事業の概要を文献3) より引用する。

●T事業は「公助・自助・共助」のバランスの取れた役割分担による地域福祉の推進を進める上で、長い歴史と層の厚いボランティアなど、・・・地域福祉に対する市民の自主的な提案（共助）に対して、行政が場所と財源について支援を行うしくみです。

●私たちは、地域に生き、地域社会の中で多くの人たちと共に支え合って生きています。高齢者や障害者が住み慣れた地域で、障害をもったとしてもその人の個人としての尊厳を大切に生活を送るためには、本人はもとより、家族や知人、ボランティア、NPO等による支えあいのしくみが必要です。

●本人の自立・自尊の精神を大切にしながら、その人にあった多様なサービスを柔軟・軽快に提供するために「近・小・軽の家」T事業を実施します。

5つの挑戦

- 1.住民ニーズに応じた柔軟・軽快なサービスの提供
 - 2.民間の力の活用（作る福祉から使う福祉へ）
 - 3.介護保険の限界を乗り越える
 - 4.利用者が当事者としての役割を担って参加できる福祉へ（自尊の尊重）
 - 5.地域に活力を生み出しサラリーマンが地域に参加する場を創出
- 7) 施設Cでは50代の痴呆性の3名を受け入れていたがこの図では省略した。
8)施設Bの利用者属性表中、「GーⅣ」の利用者は夫の付添いで利用していたが、属性調査後に利用中止し、一般型デイの利用日数を増やした。
9) 各施設の利用者室とは、施設内において利用者が利用する部分を示す。具体的には、事務室、玄関、廊下、トイレ、厨房、風呂、倉庫、別室等の面積を除いたもの。

10) 施設Cでは、開所当初には、比較的自立した利用者が見られたが、徐々に痴呆性高齢者の利用者の増加と反比例するかのごとく、利用が減少していった。そのことが利用者層が痴呆性高齢者に偏っていく傾向に拍車をかけ、相互作用的に施設の性格が定まっていた。

また、これは痴呆性老人の受入れ先を求める潜在的ニーズが発現したことを示す。例えば、デイとの併用利用者が数名おり、デイ利用日以外をミニデイを利用する、或いはデイ利用時間終了後、家族帰宅時刻までをミニデイで過ごす等、デイの補完的利用も見られた。

11) ADL7通り×痴呆スケール7通り×居住様態4通り×居住歴2通り＝396通り
12) この項の分析方法、図表表現は、文献2) を参照にした。

13) ミニデイは、事業方針では既存のデイサービスセンターを合わせてⅠ丁目にⅠ施設を整備目標としているが、未だ全市区域内に整備されていないため施設分布に偏りがある。

14) 尚、ここでいう「全体」とは、利用者スペースのうち、視覚的に一覧できる範囲をさす。

15) 文献4) 参照。

16) 「サロンタイプ」は、定義上、アクティビティプログラムがないのであるが、月に数回程度、プログラムが開催される日がある。

17) アクティビティの分類において、例えば「編み物をしながら会話する」等の重複行為は、なるべく物理的活動の方を抽出するようにした。これは、今回は活動と空間の使われ方に焦点を当てた考察であるからである。

18) 本章の分析軸表記に際し、文献5) を参考にした。

19) 文献6) 参照。

20) 筆者は、ミニデイと一般型デイの比較考察を行うため、同時期に同市内の一般型デイ2箇所（それぞれ定員40名、35名）における行動観察調査を行った。詳細は別稿にて報告予定である。その結果をもとに一般型デイの典型的状況を判断した。

21) 例えば、文献2) 等。

参考文献

- 1) 大原一興：高齢者の生活拠点移動に関する建築計画的な研究、東京大学学位請求論文、1989。
- 2) 田中裕基、登張絵夢、上野淳、竹宮健司：自立高齢者の地域生活支援施設のあり方に関する研究、日本建築学会計画系論文第562号.P.165-172、2002.12。
- 3) T事業パンフレット、M市、2000。
- 4) E.ゴッフマン：集まりの構造、誠信書房、1963。
- 5) 伊藤俊介：デンマークのフォルケスコールにおける学習活動と空間の使われ方について、日本建築学会計画系論文第549号.P.145-152、2001.11。
- 6) 山根寛ほか、集団と場、三輪書店、2000。

本研究はユニオン造形文化財団平成14年度調査研究助成を受けた。

謝辞

調査にご協力いただきましたM市および各施設の利用者や運営者の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

(2004年1月10日原稿受理、2004年4月16日採用決定)